

NPO法人こどもとむしの会の活動

八木 剛 (NPO法人こどもとむしの会)

博物館消滅のパターン

「NPO法人こどもとむしの会」は、2009年から、指定管理者として佐用町昆虫館（兵庫県佐用町）を運営している。

1971年に開館した（旧）兵庫昆虫館は、西日本初の昆虫生態展示施設として出発したが、施設は老朽化、山間の過疎地にあつて集客もままならないため、県行財政改革の俎上となり、2008年をもって廃止された。佐用町は町単独運営の可能性を模索したが、人口2万人足らずの町には予算も人材も乏しく、県の廃止方針を受け入れた。また、住民有志は存続を求める署名運動などを展開したが、町議会・行政の意思決定を覆すことはできなかった。

これは、財政状況の厳しい昨今、各地によく見られる公立施設の消滅プロセスで、一つ、また一つと、博物館は消えていく。大都市と地方では、人口密度もライフスタイルも大きく異なる。東京や大都市で成立する「展覧会集客モデル」は地方の小規模博物館では成立しない。地方の中小館が大都市と同じビジネス

をしていては、淘汰されて当然だろう。

指定管理者制度に救われた

NPO法人こどもとむしの会は、神戸大学昆虫学研究室の竹田真木生教授が、ボランティアで昆虫館を運営しようと呼びかけ、有志を募って設立された。われわれは、いったん廃止が決定された昆虫館を存続させるため、町長と面談し、署名ではなく具体的な運営プランを提示した。町長はそれに賛同して存続を打ち出し、地元自治会、議会も町長の方針転換を受け入れ、施設は町に譲渡され、2009年4月、佐用町昆虫館が開館した。

昆虫館存続にあたって、われわれは、大きく二つの提案を行った。一つは、こどもたちのための施設とすること、もう一つは、開館日数を大幅に削減しボランティアで運営することである。NPO法人をつくってこのような提案をできるのは、指定管理者制度のおかげである。

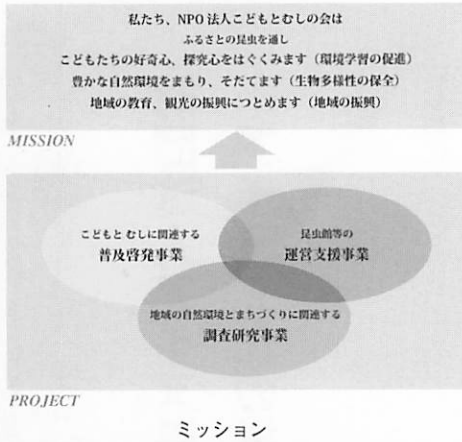
わが国では「昆虫」はこどもたちに人気があり、最近では、あれっ？と眼を疑うような分

野の博物館で昆虫展が開催されていることがある。それほどまでに昆虫は、夏休みのキラークンテンツであり、昆虫館の夏期の集客は容易である。

問題は、それ以外の季節をどう乗り切るかである。旧兵庫県昆虫館は、公立博物館設置基準相応に年間250日以上開館していたが、佐用町昆虫館は4月から10月の季節開館とし、さらに土日祝日のみの、年間70日の開館とした。かつて冬期開館のために必要であった温室は撤去された。年間通して開館できないから潰すのではなく、開館するためにどのような運営が可能か知恵を絞るべきだ。佐用町昆虫館の運営予算は年間約200万円である。



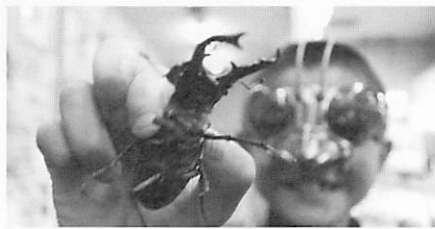
昆虫館外観



いどうこんちゅうかん



いどうこんちゅうかん



クワガタ

地域の教育力向上をめざして
佐用町の小学校は10校、児童数は2000人程度である。こ

チペーションは高い。
イベントは交わす。それ以上のイベントはないだろう。ボランティアスタッフは、カギの開け閉めから、生きものの世話、接客、トイレ掃除まですべて行う。モチベーションは高い。

のような昆虫館に地元の子どもたちも足を運べば、数年のうち

そのためには、待っていてはだめだ。2009年秋には、町内の幼稚園・保育園へ「いどうこんちゅうかん」と称して、生きた昆虫にふれる機会を提供し、小学校へは「出前昆虫教室」として、出張授業を行った。佐用町のこどもたちも、都市のこどもとたちと同様、その多くは昆虫に関心を持っていた。ただ、博物館のサービスがなく、関心を伸ばす機会がなかっただけである。これらの話はあつという間に地域に伝わり、地元自治会長らからたいへん感謝され、激励された。

年間200万円の町予算は、自治体の規模からすると小さいものではない。われわれのやるべきことは、都市部からの集客もさることながら、地元の子どもたちへの学習支援である。こどもたちへの支援が、大人も元気づけ、結果として地域振興に結びつくようにしたい。

勢いに乗じて、2010年度は「こども昆虫道場」として、昆虫館で月1回の昆虫教室を企

測定できるだろう。しかし、フタを開けてみれば、来館者の半数以上は町外からの来客であった。佐用町の人口が少ないことに加え、地元の子どもたちは、休日は神戸などの都市に遊びに出かける傾向があるようだ。

10年後、20年後に、今のこどもたちが大人になる頃には、スタッフとして運営にかかわる者も現れるだろう。そうして、小さな昆虫館が、地域の教育とコミュニティの核として機能してゆけばと思う。博物館は、小さくてもそこに存在することで大きな価値を発揮しうる。このことを広く訴えていきたい。

画した。しかし、佐用町内全小学校児童にチラシ配布したにもかかわらず、20名近くの参加者はすべて他都市の住民であった。

有料のプログラムに自ら申込むには、親にも子にも高い関心と信用が必要だ。もう少し時間をかけて、「いどうこんちゅうかん」などの取り組みを進め、来館を促し、昆虫館を教育の場として活用する土壌をつくっていく必要があるだろう。いいかえれば、それができなければ、地元の教育施設としての館の存在価値はないに等しいだろう。

【ACCESS】
〒679-5227
兵庫県佐用町船越617
TEL 0790 (77) 01003
http://www.konchukan.net/sayo/